The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 中国における地震災害とジェンダーに関する研究のレビュー : 2003-2023年の研究を中心に |
| Author(s) | 李, 婧; 大谷, 順子 |
| Citation | 大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2024, 50, p. 1-14 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/94722 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 中国における地震災害とジェンダーに関する研究のレビュー
## ―2003 － 2023 年の研究を中心に―

李　婧・大谷　順子

目　次

１．はじめに
２．研究方法
３．文献のテーマ分析と考察
４．おわりに

# 中国における地震災害とジェンダーに関する研究のレビュー
## ―2003 － 2023 年の研究を中心に―

李　婧・大谷　順子

## 1．はじめに

災害は平時においてはっきり見えないジェンダー構造を暴露するものである。「ジェンダー」は、1960 年代に第二次フェミニズム運動の中で登場した概念であり、70 年代以降女性学・ジェンダー研究者によって広く採用され定着した（上野 2006）。「セックス」は生物学的カテゴリーの概念に対して、「ジェンダー」は社会的、文化的カテゴリーの概念である。1995 年に北京で開催された第 4 回世界女性会議（以下：北京会議）で採択された「北京行動綱領」では、ジェンダー平等の実現に向けて「ジェンダー主流化」（mainstreaming a gender perspective）のプロセスを提起した。災害とジェンダー研究で先駆的な役割を果たしている Enarson, E. & B. Morrow（1998）が人類学、社会学等の多様なアプローチで研究を行った。「従来の性別の視点に立った災害研究では女性の脆弱性が総じて強調されてきたが、最近の研究では、女性の主体性や女性側の視点からの災害対策も研究対象となっている。」（楊 2021：308）

災害大国の日本では、北京会議開催の同年に 1995 年阪神・淡路大震災が起き、「災害と女性」のテーマがそれを契機に注目された（相川 2006）。以降、日本では、女性差別撤廃条約、男女共同参画社会基本法等を後ろ盾に、様々な法制度改革の前進が進んだ。日本は災害多発国として、これまで災害に関する研究が多く蓄積されてきたが、女性やジェンダーの視点による災害研究はまだ発展途上である（浅野・天童 2021）。これまで日本において「災害と女性」に関する社会学的研究の着目点は大きく、女性が受ける被害と、防災や復興における女性が果たす役割にある。女性の被害に関しては、特に避難生活における女性特有のヘルス問題、災害時に固有な性別役割分担によるケア責任の偏在やドメスティック・バイオレンス、性暴力などがこれまでの研究で指摘された。また、女性が果たす役割に関しては、災害後に女性が実践した様々な支援活動や、防災に関する女性のリーダーシップ養成等の実践活動について研究がなされてきた。

一方、中国では、2008 年に発生した 5・12 四川大地震は、これまで地震国として知られてこなかった中国に大きな地震が発生することを国内外に知らしめた。2008 年四川大地震後に中国では地震や災害の研究が盛んになっている。しかし一方、中国の地震災害とジェンダーについての研究がわずかである（胡 2010）。本稿の目的は、ここ 20 年の中

国の学術文献システムに掲載されている論文を整理し、中国の地震災害とジェンダーに関する研究の動向を明らかにすることである。

## ２．研究方法

本稿では、CNKI(China National Knowledge Infrastructure、中国学術文献オンラインサービス）[1)] に掲載されている中国の地震災害復興とジェンダーに関する論文を抽出し、関連論文の研究動向の検討を試みる。検索範囲は 2003 年から 2023 年までのすべての文献とした。中国語では、「ジェンダー」は「社会性別」と訳されており、CNKI で対象を抽出する際に「地震」「性別」「女性」「男性」のキーワードで 3 回検索作業を行なった。まずは、「地震」と「性別」で主題検索を行った結果、要旨にこの二つのキーワードが含まれている論文が 111 件となった。「地震」と「女性」で主題検索を行なった結果、計 98 件となった。「地震」と「男性」で主題検索を行なった結果、計 50 件となった。これらの結果で収集しデータの基本情報を Microsoft Excel に入力して重複の文献を排除し、「地震災害とジェンダー」を論じている文献を手作業で再抽出し、本文が閲覧できないものを除外し、残った 40 件の論文を本研究の対象とした。

## ３．文献のテーマ分析と考察

この 40 件の論文は対象の地震は 2008 年の四川大地震、2010 年青海玉樹地震、2013 年雅安芦山地震、2014 年雲南魯甸地震が含まれている。著者（出版年)、タイトル（筆者による日本語訳）および論文のキーワードのリストは以下の表 1 にまとめている。

表１　本稿で検討する論文リスト

| 著者（出版年） | タイトル（筆者による日本語訳） | キーワード |
|---|---|---|
| 张晋芳・彭超英ほか（2010） | 四川地震灾区人员心理状况的调查研究（四川被災区被災者心理状況の調査研究） | 被災者の心理健康；性別；教育水準 |
| 张迪・伍新春ほか（2021） | 青少年创伤后应激障碍症状与网络成瘾症状的关系：惩罚敏感性和孤独感的中介及性别的调节（青少年の外傷後ストレス障害症状とインターネット中毒症状の関連性：罰感覚受容度と孤独感の中介効果、および性別の調節） | 四川大地震 9 年後；中学生；PTSD 症状とインターネット中毒症状の関連性；性別 |
| 游永恒・张皓ほか (2010) | 四川地震灾后阿坝州中小学教师心理创伤研究报告（四川大地震災後における阿壩州の小中学校教師の心的外傷研究報告） | 幼稚園及び小中学校教师;PTSD症状;ソーシャルサポート |
| 刘平・王淳ほか (2010) | 5·12 汶川地震前后灾区焦虑抑郁障碍病人症状对比研究（5・12 汶川地震前後の災害地域における不安およびうつ病障害患者の症状の比較研究） | 被災者；うつ症状；性別比較；比較研究 |

| | | |
|---|---|---|
| 李海峰・况伟宏ほか(2010) | 成都、德阳地区地震 8 个月后老年人抑郁状况及其相关因素（成都と德陽地域：地震発生から 8 か月後の高齢者のうつ状態とその関連要因） | 被災地；高齢者；うつ病状態 |
| 向莹君・熊国玉ほか(2010) | 汶川地震灾区 1960 名中学生创伤后应激障碍症状调查（汶川地震被災地の 1,960 人の中学生に対する创傷後ストレス障害症状の調査） | PTSD 症状；女性；農村学生；少数民族 |
| 张本・许瑞芬ほか（2009） | 汶川大地震急性应激障碍检出率及相关因素的调查研究（地震災害地域の住民に対する創傷性ストレス障碍の調査） | ASD、汶川大地震、サバイバル |
| 雷丹・赵玉芳ほか（2009） | 地震灾区居民社会支持状况分析（地震災害地域の住民の社会的支援状況分析） | ソーシャルサポート；德陽市、綿竹市、什邡市、漢旺鎮；女性；男性 |
| 王波・王安辉ほか(2009) | 地震灾区居民创伤应激障碍调查（地震災害地域の住民に対する創傷性ストレス障害の調査） | 青川県、被災者、PTSD、女性、心のケア |
| 赵高锋・杨彦春ほか（2009） | 汶川地震极重灾区社区居民创伤后应激障碍发生率及影响因素（汶川地震の極めて被害が大きかった地域のコミュニティ住民における創傷後ストレス障害の発生率と影響要因） | PTSD 測量、女性、男性、ソーシャルサポート |
| 赵玉芳・胡丽ほか（2009） | 汶川震后一个月受灾者心理应激状况（汶川地震発生から 1 か月後の被災者の心理的ストレス状況） | 帰属感覚、ソーシャルサポート、安全感、心理健康 |
| 吴坎坎・张雨青ほか（2009） | 灾后民众创伤后应激障碍 (PTSD) 与事件冲击量表 (IES) 的发展和应用（災害後の一般市民における創傷性ストレス障碍（PTSD）とイベントインパクトスケール（IES）の開発と応用） | 被災区、綿竹、心のケア、早期発見 |
| 沈兴华・叶小飞（2009） | 地震灾区茂县成人震后急性应激心理反应及干预研究（地震災害地域の茂県の成人における地震後の急性ストレス心理反応および介入研究） | カウンセリング、治療、女性、心理健康 |
| 高新・学况利（2009） | 地震灾后转移伤员的创伤后应激障碍的发生及其影响因素（地震発生後の転送傷者における創傷性ストレス障碍の発生とその影響要因） | PTSD、女性、転送負傷者 |
| 许瑞芬・张本ほか（2010） | 汶川大地震后儿童急性应激障碍检出率及相关因素的调查研究（汶川大地震後の児童における急性ストレス障害の検出率と関連要因の調査研究） | ASD、子ども、長期的なケア、性別 |
| 沈兴华・叶小飞ほか（2010） | 茂县城区地震灾民震后 7 ～ 9 周 PTSD 症状反应调查（茂県の都市地域で、地震の発生後 7 ～ 9 週間の間に PTSD 症状の反応を調査） | 被災区、茂县住民、PCL-C、DSM−R、PTSD 形成期 |
| 齐建林・段丽娜ほか（2010） | 汶川地震男性救援者创伤后应激障碍危险因素研究（汶川地震における男性の救助者の創傷性ストレス障害の危険因子研究） | 男性救援車、PTSD、救援活動 |

| | | |
|---|---|---|
| 何树德・陈晓清（2010） | 地震极重灾区小学教师的创伤后应激障碍调查（地震重度被災地域の小学校の教師における創傷後ストレス障害の調査） | 青川县小学教师、PTSD、親族 |
| 魏强（2011） | 地震灾区农村留守与非留守学前儿童体质状况比较（地震災害地域の農村地域に住む留守児童と非留守児童の学前体力状態比較） | 被災区、農村児童、女児、男児、身体能力 |
| 郑裕鸿・柳武妹ほか（2011） | 地震后青少年焦虑的特征及影响因素研究（地震後の青少年の不安特性と影響要因の研究） | 青少年、都江堰市、女性、男性、居住地、影響因子 |
| 刘青・杜忠潮ほか（2011） | 陕西略阳县居民地震灾害感知研究（陝西省略陽県の住民における地震災害の認識に関する研究） | 災害認知度、男性、女性、学歴、メディア |
| 齐建林・郭琳ほか（2011） | 汶川地震后 3 个月和 6 个月男性救援者创伤后应激障碍比较研究（汶川地震後の 3 か月と 6 か月後の男性救援者の創傷後ストレス障害の比較研究） | 男性救援者、PTSD 症状、PLC-C |
| 胡天超・杨新ほか（2011） | 汶川地震青川灾区儿童青少年精神疾病流行病学调查（汶川地震の青川災害地域における児童および青少年の精神疾患の流行病学的調査） | 被災地、青川灾区、児童、青少年、心理健康 |
| 杨玉谨（2011） | 地震灾后青海省玉树藏区中学生心理应激强度的调查研究（地震災害後の青海省玉樹チベット地域の中学生における心理的ストレス強度の調査研究） | 青海玉树チベット族地区、中学生、心理健康、性別 |
| 杜娜・朱翠珍ほか（2012） | 5.12 汶川大地震后 24 个月灾区小学生心理健康状况调查（5.12 汶川大地震後の 24 か月後、災害地域の小学生の心理健康状態調査） | 小学生、心理健康、被災区、彭州、家族の負傷程度、心のケア |
| 柳武妹・范方ほか（2012） | 地震重灾区丧失子女者的创伤后应激症状 2 年随访（地震の被害が深刻な地域で子供を失った人々の創傷後ストレス症状の 2 年間のフォローアップ調査） | 子どもを失った被災者、女性、男性、PTSD |
| 徐翔・刘伟志ほか（2012） | 地震后 26 个月灾区高三学生生命质量调查（地震後 26 か月、災害地域の高校 3 年生のライフクオリティに関する調査） | 高校生、ライフクオリティ、心理健康、男性、女性 |
| 杨眉（2014） | 汶川地震 5 年后灾区居民社会支持现状（汶川地震から 5 年後の災害地域住民の社会的支援の現状） | ソーシャルサポートの利用状況、男性、女性、未成年 |
| 赵燕･刘娥（2016） | 云南鲁甸震后青少年心理健康状况及其影响因素（雲南省魯甸地震後の青少年の心理健康状態および影響要因） | 雲南、被災区、青少年心理健康、物的支援、心理的支援 |
| 成燕・李娜ほか（2020） | 芦山地区震后 3 年青少年焦虑相关情绪障碍及其风险因素（芦山地域の地震発生後 3 年の青少年の不安と関連情緒障害、およびそのリスク要因） | 芦山地震、青少年、心理的健康、女性 |

| | | |
|---|---|---|
| 杨婷・高长青ほか（2020） | 地震受灾群众三年后创伤后成长和相关因素现况调查（地震被災者 3 年後の創傷後成長と関連要因の現状調査） | 鲁甸地震、被災区、龍頭山鎮、PTSD、ソーシャルサポート、女性 |
| 李铁钢・王鸣ほか（2008） | 地震灾后居住帐篷居民性生活状况与焦虑关系（地震災害後、テントで生活する住民の性生活状況と不安の関係） | 避難生活、性生活、心理健康、女性 |
| 张金凤・赵品良・史占彪（2012） | 玉树地震后幸存者的创伤后应激症状、生活满意度与积极情感 / 消极情感（玉树地震の生存者の創傷後ストレス症状、生活満足度、ポジティブ感情 / ネガティブ感情） | 玉树地震、PTSD、生活満足度、女性、少数民族 |
| 庄天慧・张海霞・张国培（2010） | 地震受灾农民主动参与住房重建的影响因素分析（地震被災した農民が住宅の再建に積極的に参加する要因の分析） | 住宅復旧、復興活動への参加度、農民、性別 |
| 裴谕新（2011） | 性、妇女充权与集体疗伤——关于四川地震灾区刺绣小组的个案研究（性別、女性の権利の促進、および集団的な癒し：四川地震災害地域の刺繍グループに関する個別ケース研究） | ジェンダー、被災区、草の根組織、女性のエンパワメント、復興活動 |
| 安媛媛・苑广哲・伍新春ら（2018） | 社会支持对震后青少年创伤后应激障碍和创伤后成长的影响：自我效能感的中介作用（震災後の青少年の創傷後ストレス障害と創傷後成長への社会的支援の影響：自己効力感の中介作用） | 中学生、ソーシャルサポート、重度被災区 |
| 伍新春・王文超・周宵ら（2018） | 汶川地震 8.5 年后青少年身心状况研究（汶川地震発生から 8.5 年後の青少年の身体と心の状態の研究） | 青少年、心身健康、生活満足度 |
| 郑璐璐・魏青・邓晶（2015） | 汶川地震灾区学生创伤后压力反应调查（汶川地震災害地域の学生における創傷後ストレス反応調査） | 被災区、青川、PTSD、性別、学年 |
| 尚远方・刘瞳（2012） | 女性—抵御灾害的无形力量（女性—災害に対抗する不可視の力） | 伝統的な観念、性別役割、防災知識 |
| 于圣洁・张纯刚・齐顾波（2014） | 自然灾害情境下的性别研究：回顾与前瞻（自然災害の状況下での性別に関する研究：過去と将来の展望） | ジェンダー、脆弱性、女性の健康 |

出所：筆者作成

これらの文献は、次の 3 つの主要カテゴリーに分類される。一つ目、地震災害が被災者に及ぼす心理的影響におけるジェンダーの差異に関する研究である。二つ目、救援活動や避難生活におけるジェンダーに関連する問題に焦点を当てた研究である。三つ目、復興プロセスにおける女性のエンパワーメントについての研究である。

### 3.1 地震災害が被災者に与える心理的な影響のジェンダーの差異

本稿で検討されている文献の中で、震災後の被災者の心理健康状態及びその回復におけるジェンダーの差異についての文献が最も多い。その研究対象は、一般被災者、小学生、中学生、高齢者、小中学校教師等である。张・彭ら（2010）は、四川大地震の被災者の

心理状態を調査し、被災者全体において心理的な不調反応がみられ、半数以上が心理的なサポートが必要であることを示している。性別および教育水準による心理健康状態の顕著な差異も明らかにされ、女性の不調反応が男性よりも高く、教育水準の高い被災者ほど不調反応が少ない傾向あることが示唆された。また、游・张ら（2010）は、アバ州の小中学校の教師を対象に、PTSD 症状に焦点を当てて調査を行い、女性が男性より深刻の結果があった。李・况ら（2010）は、四川大地震 8 ヶ月後、成都と徳陽の被災地域に住む 390 人の高齢者を対象に、うつ症状に焦点を当てて研究を行った。その結果、地震後 8 ヶ月経っても高齢者のうつ病症状が深刻であり、30.3％の高齢者がうつ病症状を示していたことが明らかになった。災害後の心理的な介入においては、特に女性、教育水準の低い被災者、農業に従事し続けている被災者に焦点を当てる必要があることが示唆された。その他にも、被災した 1960 名の中学生を対象にした研究（向・熊ら 2010）、子供の PTSD に関する研究（许・张ら）、避難所での性生活状況と心理状態との関連性についての研究（李・王ら 2010）をされている。

一方、雷・赵・汤ら（2009）の研究においては、四川大地震の被災地域で 290 名の住民を対象に行われたアンケート調査とインタビュー調査を通して、物質的サポート、感情的サポートの分析が行われた。その結果、男性が女性と比較して感情的サポートを受けている割合が低いこと、また、男性の心理的健康状態は家族関係に強く影響を受けていることが明らかになった。被災者の健康と心理的回復に、女性だけでなく、男性への感情的なサポートも重要であることが強調されている。

### 3.2 救援活動と避難所の課題

四川大地震の被災者支援に関して、特に辺鄙な地域や経済的に発展が遅れている少数民族の地域では、被災した女性たちは、男性の救援者や医療スタッフからの助けを拒否し、その結果、救援と治療が遅れることがあった（胡 2010）。また、四川大地震時には、臨時避難所内で男女別のトイレが設置されておらず、女性は男性と同じトイレを使用することを避けるため､水を我慢することや夜間のトイレを我慢することがあった。さらに、避難所内では電気が不足しており、公共の入浴施設が整備されていなかったため、性的暴力が発生しやすい状況であった。臨時避難所は男性が女性に対して権力とコントロールを行使する場所と化し、女性たちの声が潜在的な暴力の脅威から抑制されていた。このような権力構造は男女の間での権力関係に起因し、災害によるストレスが女性にさらなる負担をかけていたことを胡（2010）が指摘している。また、李・王ら（2008）は、仮設住宅で避難している被災者の性生活の状況についてアンケート調査と聞き取り調査を行い、その結果、四川大地震の発生後に仮設住宅で避難している被災者の一部が性生活を継続しており、適切な性生活が被災後の不安を緩和する可能性があることが示唆された。これからは特に 40 ～ 49 歳の年齢層の女性の性生活状況に焦点を当てる必要があることが強調されている。

### 3.3 震災復興活動におけるジェンダー

以上検討してきたように、中国の地震災害とジェンダーについて論じられた文献では、心理学的な研究が大半であり、PTSD 測量スケールで行った量的研究が多い。ジェンダーの視点からなされてきた社会学の研究が少ない。その中で、胡（2010）の研究では、女性の戸籍問題による救援資源不平等分配や、伝統な性別役割による復興活動の制約が指摘されている。しかし、庄・张ら（2010）は被災区の五つの村の住民を対象に、住宅の再建活動への参加とその要因を調査し、震災後の住宅再建活動への参加要因に性別との関連性があまり見られず、教育水準との正の関連性が強調された。裴（2010）は、人類学、社会学の側面から四川大地震後に汶川県の女性の復興活動－刺繍グループの活動を２年間にわたり参与観察、フォーカスグループ、個別インタビューを通じて研究を行った。三人の女性のライフストーリーをメインに災害と女性のエンパワメントについて検討してきた。女性たちは刺繍グループの活動によって家庭収入を増やし、震災前より、家庭では経済的な権利を持っている。一方、政治的な権利も、刺繍グループに参加したことで獲得した。女性の刺繍グループは村の復興モデルとして宣伝され、女性たちはそれまでなかった発言の権利を得られた。また、刺繍グループの発展により、組織としての成長や外部組織や団体との交渉と連携が増え、参加者女性たちのリーダーシップが組織の成長とともに形成された。また、刺繍グループによる女性同士の関係は、親族関係以外最も親密な関係になっていた。

裴（2010）の研究ではそれまでの女性の復興活動の研究であまり検討されてこなかった 2 点がある。一つ目は、刺繍グループの活動に参加した女性はこうした活動に参加する動機とモチベーションに彼女たちが被災した前の仕事経験と強く関連していることである。裴の研究対象の女性の中には被災した前に四川から省外へ出稼ぎに行った経験がある女性がいて、結婚したあとは家庭に戻り、家畜の飼育と農業をこなす。こうした家庭労働は彼女たち自身が「遊び」（四川方言：耍）と呼ぶ。裴は、被災女性の中ではそうした出稼ぎの経験がある女性は自らの出稼ぎ経験を美化する傾向があることと、そうした経験はその後の彼女たちが復興活動に参加することに強く影響していると指摘した。彼女たちは積極的に女性の復興活動に参加することは伝統的な性別役割を打破する試みであり、「キャリアウーマン」に転換する意欲が見られた。二つ目は、女性たちはこうした活動により経済的、政治的な権利を得たものの、彼女たちの日常生活及び日々の活動に強く影響するのが、「夫」「元夫」「交際相手」との「性関係」にあることである。こうした復興活動を行っている彼女たちは、「夫に自分がやっている活動を知ってもらいたい」、「夫に認めてもらいたい」、女性としての価値は、性関係に強く影響されていることを裴(2010)は指摘している。それはそれまでの研究では触れてこなかったテーマである。

日本においても、震災後に女性たちの手仕事やグループ活動に関する研究が多く見られる。女性たちがこうした活動に参加することについて「心のケア」、「経済的な意義」の側面で論じられることが多い。例えば、堀（2019）は 2014 年から東日本大震災の被

災地でフリー刺繍による作品作りを企画・運営した女性4名にインタビュー調査を実施し、こうした手仕事の意義は、言語化が難しい女性たちの経験や思いを表現する機会となったことや、手仕事の場が「女性同士が安心しておしゃべりできる親密な関係性のある空間」となり、経験を語り始めるきっかけとなることにあると述べている。

## 4．おわりに

以上、中国学術文献オンラインサービスCNKI(China National Knowledge Infrastructure)に掲載されている2003年から2023年までの中国の地震災害とジェンダーに関する文献を整理して考察してきた。中国国内でジェンダーの視点が含まれる四川大地震の研究傾向は、救援活動や避難生活におけるジェンダーに関連する問題に焦点を当てた研究と復興プロセスにおける女性のエンパワーメントについての研究はすくないながらあるが、地震災害が被災者に及ぼす心理的影響におけるジェンダーの差異に関する研究がほとんどである。つまり女性の脆弱性、災害弱者である立場が強調されている研究がほとんどであり、女性の主体性の視点からの研究はまだ少ない。最後に分析した災害後に刺繍活動に参加した女性の研究では、これまでの研究であまり検討されてこなかった被災した前の女性の仕事経験や復興活動に参加した女性たちの男性関係にも着目し、これからの研究に新たな動向を提示した。楊（2021）が述べているように、「大多数の研究では女性が災害で経験する事象を浮き彫りにし、その叙述において女性を通常被害者とみなし、男性の保護を必要とする存在として描いているが、より深層においてジェンダー不平等と男性支配の社会構造がどう結びつくか、その点を探るものではない」(p.308)。災害とジェンダー研究に関してはより深層におけるジェンダー関係を探る必要があると考えられる。

本稿は、中国学術文献オンラインサービスCNKIに掲載されている論文を絞って分析と考察を行ってきたが、中国の災害や地震について中国国外の研究者も多くなされてきている。例えば､大谷順子（編）(2021)『四川大地震から学ぶ－復興のなかのコミュニティと「中国式レジリエンス」の構築』（九州大学出版会）では四川大地震についてNGO、被災高齢者、災害観光、防災教育などの側面から系統的に分析が行われた。今後はそうした中国国内研究者と国外研究者の視点を比較しながら災害とジェンダーの課題を明らかにすることを試みる。

**注**

1）CNKIは1984年から公開された中国の文献データベースである。CNKIでは学術雑誌、重要新聞､博士･修士学位論文､重要学術会議論文､外国語文献､統計データ等の各種データベースが収録されている。

## 参考文献

### 中国語

安媛媛・苑广哲ほか（2018）「社会支持对震后青少年创伤后应激障碍和创伤后成长的影响：自我效能感的中介作用」『心理发展与教育』第 34 巻第 1 号 , 98-104 頁

成燕・李娜ほか（2020）「芦山地区震后 3 年青少年焦虑相关情绪障碍及其风险因素」『中国学校卫生』第 41 巻第 6 号 , 855-858 頁

杜娜・朱翠珍ほか（2012）「5.12 汶川大地震后 24 个月灾区小学生心理健康状况调查」『华西医学』第 27 巻第 2 号 , 254-258 頁

高新学・况利ほか（2009）「地震灾后转移伤员的创伤后应激障碍的发生及其影响因素」『中国心理卫生杂志』第 23 巻第 4 号 , 259-263 頁

何树德・陈晓清（2010）「地震极重灾区小学教师的创伤后应激障碍调查」『职业与健康』第 26 巻第 19 号 , 2164-2166 頁

胡天超・杨新ほか（2011）「汶川地震青川灾区儿童青少年精神疾病流行病学调查」『中国健康心理学杂志』第 19 巻第 8 号 , 933-934 頁

胡艳红（2010）「基于社会性别的灾难社会工作−以汶川地震为例」『妇女社会工作』第 5 巻第 93 号 , 28-33 頁

雷丹・赵玉芳ほか（2009）「地震灾区居民社会支持状况分析」『中国公共卫生』第 25 巻第 9 号 , 1038-1039 頁

李海峰・况伟宏ほか（2010）「成都、德阳地区地震 8 个月后老年人抑郁状况及其相关因素」『中国心理卫生杂志』第 24 巻第 2 号 , 122-125 頁

李铁钢・王鸣ほか（2008）「地震灾后居住帐篷居民性生活状况与焦虑关系」『中国公共卫生』第 10 号 , 1154-1155 頁

刘平・王淳ほか（2010）「5・12 汶川地震前后灾区焦虑抑郁障碍病人症状对比研究」『中国健康心理学杂志』第 18 巻第 2 号 , 139-142 頁

刘青・杜忠潮（2011）「陕西略阳县居民地震灾害感知研究」『咸阳师范学院学报』第 26 巻第 2 号 , 67-71 頁

柳武妹・范方ほか（2012）「地震重灾区丧失子女者的创伤后应激症状 2 年随访」『中国心理卫生杂志』第 26 巻第 4 号 , 252-256 頁

裴谕新（2011）「性、妇女充权与集体疗伤—关于四川地震灾区刺绣小组的个案研究」『开放时代』第 10 号 , 36-48 頁

齐建林・段丽娜ほか（2010）「汶川地震男性救援者创伤后应激障碍危险因素研究」『中国健康心理学杂志』第 18 巻第 11 号 , 1316-1318 頁

齐建林・郭琳ほか（2011）「汶川地震后 3 个月和 6 个月男性救援者创伤后应激障碍比较研究」『中国健康心理学杂志』第 19 巻第 6 号 , 670-672 頁

尚远方・刘瞳（2012）「女性——抵御灾害的无形力量」『中国减灾』第 18 号 , 18-19 頁

沈兴华・叶小飞ほか（2009）「地震灾区茂县成人震后急性应激心理反应及干预研究」『中

国健康心理学杂志』第 17 巻第 4 号 , 479-481 頁
沈兴华・叶小飞ほか（2010）「茂县城区地震灾民震后 7 ～ 9 周 PTSD 症状反应调查」『中国健康心理学杂志』第 18 巻第 8 号 , 1002-1005 頁
王波・王安辉ほか（2009）「地震灾区居民创伤应激障碍调查」『中国公共卫生』第 25 巻第 9 号 , 1067-1068 頁
魏强（2011）「地震灾区农村留守与非留守学前儿童体质状况比较」『中国学校卫生』第 32 巻第 3 号 , 321-323 頁
吴坎坎・张雨青ほか（2009）「灾后民众创伤后应激障碍 (PTSD) 与事件冲击量表 (IES) 的发展和应用」『心理科学进展』第 17 巻第 3 号 , 495-498 頁
伍新春・王文超ほか（2018）「汶川地震 8.5 年后青少年身心状况研究」『心理发展与教育』第 34 巻第 1 号 , 80-89 頁
向莹君・熊国玉ほか（2010）「汶川地震灾区 1960 名中学生创伤后应激障碍症状调查」『中国心理卫生杂志』第 24 巻第 1 号 , 17-20 頁
徐翔・刘伟志ほか（2012）「地震后 26 个月灾区高三学生生命质量调查」『中国健康心理学杂志』第 20 巻第 9 号 , 1386-1388 頁
许瑞芬・张本ほか（2010）「汶川大地震后儿童急性应激障碍检出率及相关因素的调查研究」『中国健康心理学杂志』第 18 巻第 7 号 , 818-820 頁
杨眉 (2014)「汶川地震 5 年后灾区居民社会支持现状」『中国健康心理学杂志』第 22 巻第 11 号 , 1675-1678 頁
杨婷・高长青ほか（2020）「地震受灾群众三年后创伤后成长和相关因素现况调查」『中国心理卫生杂志』第 34 巻第 4 号 , 311-315 頁
杨玉谨 (2011)「地震灾后青海省玉树藏区中学生心理应激强度的调查研究」『青海师范大学学报（自然科学版）』第 27 巻第 3 号 , 105-108 頁
游永恒・张皓ほか（2010）「四川地震灾后阿坝州中小学教师心理创伤研究报告」『四川师范大学学报（社会科学版）』第 37 巻第 2 号 , 52-56 頁
于圣洁・张纯刚ほか（2014）「自然灾害情境下的性别研究：回顾与前瞻」『妇女研究论丛』第 6 号 , 109-115 頁
张本・许瑞芬（2009）「汶川大地震急性应激障碍检出率及相关因素的调查研究」『中国健康心理学杂志』第 17 巻第 10 号 , 1158-1160 頁
张迪・伍新春ほか（2021）「青少年创伤后应激障碍症状与网络成瘾症状的关系：惩罚敏感性和孤独感的中介及性别的调节」『心理科学』第 44 巻第 5 号 , 1134-1140 頁
张金凤・赵品良ほか（2012）「玉树地震后幸存者的创伤后应激症状、生活满意度与积极情感 / 消极情感」『中国心理卫生杂志』第 26 巻第 4 号 , 247-251 頁
张晋芳・彭超英ほか（2010）「四川地震灾区人员心理状况的调查研究」『教育理论与实践』第 30 巻第 6 号 , 34-36 頁
赵高锋・杨彦春ほか（2009）「汶川地震极重灾区社区居民创伤后应激障碍发生率及影响因

素」『中国心理卫生杂志』第 23 巻第 7 号 , 478-483 頁
赵燕・刘娥（2016）「云南鲁甸震后青少年心理健康状况及其影响因素」『中国健康教育』第 32 巻第 2 号 , 127-130 頁
赵玉芳・胡丽ほか（2009）「汶川震后一个月受灾者心理应激状况」『中国健康教育』第 25 巻第 5 号 , 356- 358 頁
郑璐璐・魏青ほか（2015）「汶川地震灾区学生创伤后压力反应调查」『中国学校卫生』第 36 巻第 10 号 , 1500-1506 頁
郑裕鸿･柳武妹（2011）「地震后青少年焦虑的特征及影响因素研究」『中国健康心理学杂志』第 19 巻第 5 号 , 573-576 頁
庄天慧・张海霞ほか（2010）「地震受灾农民主动参与住房重建的影响因素分析」『青海社会科学』第 4 号 , 99-103 頁

**日本語**

大谷順子（編）（2021）『四川大地震から学ぶー復興のなかのコミュニティと「中国式レジリエンス」の構築』九州大学出版会
堀久美（2019）「女性の災害経験を記録する活動の意義―アンケートや聞き取りによる記録活動を中心に」『現代行動科学会誌』第 35 号 , 1-10 頁
楊雪（2021）「災害研究におけるジェンダーの視点」『文化人類学』第 86 巻第 2 号 , 307-313 頁
相川康子（2006）「災害とその復興における女性問題の構造 -- 阪神･淡路大震災の事例から」『国立女性教育会館研究ジャーナル』第 10 号 , 5-14 頁
浅野富美枝・天童睦子（編）（2021）『災害女性学をつくる』生活思想社 .
上野千鶴子（2006）「ジェンダー概念の意義と効果」『学術の動向』第 11 巻第 11 号 , 28-34 頁

**英語**

Enarson, E. & B. Morrow(eds)1998. The Gendered Terrain of Disaster: Through Women’s Eyes. Praeger.

# A Review of Research on Earthquake Disasters and Gender in China for the Period 2003 to 2023

Jing Li and Junko Otani

In Japan, the topic of "Disasters and Women" emerged after the 1995 Great Hanshin-Awaji Earthquake. Although Japan, being disaster-prone, has extensive research on disaster-related subjects, studies exploring women's perspectives in disaster contexts are still in their infancy. Sociological research in Japan on "Disasters and Women" has concentrated mainly on vulnerability theory, examining the harm that women endure and the roles they assume in disaster prevention and recovery. With regard to harm to women, prior studies have underscored issues unique to women during evacuation, such as health issues, unequal caregiving responsibilities during disasters, rooted in gender roles, domestic violence, and sexual violence. In China, significant seismic events such as the 2008 Sichuan Earthquake, the 2010 Yushu Earthquake, the 2013 Lushan Earthquake, and the 2014 Ludian Earthquake have occurred in a country not previously known for such incidents. Although research on earthquakes and disasters has become more common in China, studies focusing on gender remain scarce in this field. This study reviews the literature on earthquake disasters and gender in China, sourced from the China National Knowledge Infrastructure, for the period 2003 to 2023. By doing so, we aim to discern the research trends in studies related to earthquake disasters and gender in China.

Key words: disasters, earthquake, women, gender, research review, the China National Knowledge Infrastructure (CNKI)